

藤村 忠寿

小さな村がある。その村の良さを伝えるには、いくつかの方法がある。

「ここは本当にいいところなんだあ。春になったら花がいつぱいに咲いてなあ。」。村の美しい風景をバックに、地元のバアちゃんが語りかける。バアちゃんの朴訥な言葉と、そこに映し出される風景は、人々の「聴覚と視覚」に強く訴えかけ、「ああ、いいところなんだな」と、人々は納得するだろう。

一方、その村を捨て、今は都会で暮らす若者が、ふと「あそこは、本当にいいところだった…」と、そうつぶやく。そこに美しい風景や具体的

な説明がなくても、その若者の短い言葉は、きつと人々の「感情」に訴えかけるだろう。「キミの故郷は、いいところなんだろうな」。そこには淡い気持ちがいっぱいでも、ほんのりと残る。

『水曜どうでしょう』という番組は、北海道の番組でありながら地元を飛び出して、日本各地、世界各国を旅している。そして行く先々で、道産子の大泉洋はこう言う。「早く北海道に帰りたい」。

この番組を見る全国の視聴者は、大泉と同様、北海道という土地にいつしか「安息」を求めるようになった。番組ではほとんど北海道を

紹介していないのに、彼らは時間が出来れば北海道にやって来て、心と体を休めて、そして帰って行く。

北海道には、いいモノがたくさんある。でもそれは、日本中の人がすでに知っている。伝えるべきは情報だけではないと思う。知識や情報だけの提供は、往々にして「自慢」に成り下がる。何十年も地元に住み続けたバアちゃんの言葉であれば人は耳を傾けるだろうが、それ以外の人間が人に伝えるためには感情が必要だ。

まずは、北海道に住む我々自身が、北海道に抱く感情。それをほつきり自覚しなければならぬ。「北

北海道を
外から見てみると

北海道はいいとこだ。それはわかっている。でも、なぜいいと感じるのか？ それを知るためのひとつの手段が、自分たちも外へ出ること。外から北海道を見る視線。それを持つてはじめて、北海道の良さを、人々に伝えることができると思うのです。

藤村 忠寿／ふじむら ただひさ 1965年愛知県生まれ。90年北海道大学法学部卒、北海道テレビ放送（HTB）入社、東京支社編成業務部に配属。営業デスク業務を5年間経験した後、95年札幌本社制作部に異動。翌年、チーフディレクターとして『水曜どうでしょう』を立ち上げる。番組内では、ディレクターでありながらタレントよりもよくしゃべり、よく笑う。北海道ローカル番組としてスタートした同番組は、05年現在、全国31局で放送されている。

